

6月例会 私の投稿句の背景

(投稿句) 褪せし遺影並ぶ本家の夏座敷

本家の夏座敷抄

北 洋一

私の母は、五人の兄と三人の姉のいる九人兄妹の裾子(末っ子)として育った。長男と三男は海軍の職業軍人で、五男は陸軍の応召軍人であったがいずれも戦死し、国鉄に勤めていた次男が戦後本家を継いだ。満鉄に勤めていて戦後引き上げて来た四男は、本家の近くに分家を構えた。母の三人の姉たちは、戦前にみな嫁いでいて本家のあるその町か、近隣の街に住んでいた。農繁期には、みんな手助けに呼ばれ、そのお返しでもあろうが、一年中各一家が困らない白米をそれぞれ貰っていた。

本家の家屋敷は、瓦葺の母屋と、藁葺きの曲がり屋(南部地方のように曲がり屋と呼称していた訳ではない)からなっていた。母たち兄妹はみんな藁葺きの曲がり屋で育ち、長男が結婚するにあたって瓦葺の母屋を、祖父が同じ敷地内に建てたものである。

藁葺きの曲がり屋は、囲炉裏のある団欒部屋の他に、居間が四つか五つあり、仏間もある大きな建屋で、曲がった先には牛が一頭飼われていた。尤も仏間の仏壇などはみな新築の母屋に移されていた。

母屋には、祖父母用の立派な部屋もあったが、二人は移らず、曲り屋に住み続けていた。長男は、横須賀や呉での地上勤務もあって、その時は奥さんと呼び寄せていたので、誰も寝泊まりするものがないという

ことも多く、その度に祖母が両方の建屋を見ていたという。

敗戦間近の春に、私は母に連れられてこの母の里に疎開し、祖父母のいた曲がり屋の一部屋に、戦後しばらくの間居候していた。私は未だ三歳だったが不思議に鮮明な記憶が蘇る。

疎開した頃、母屋には、既に戦死した長男に残された未だ若かった奥さんが独りで居られた。子供心にも覚えのある奇麗な人だった。終戦になって暫くすると、子供のなかった奥さんは本家を去られて、次男一家が、国鉄の官舎から移り住んできて本家を継いだ。このあたりの微妙なあれこれを母に聞いた覚えがあるが本当のところは、私は知らない。

満鉄にいた四男は、戦後二年ほどして引き上げて来て、国鉄の動力車労組の役員等をしていてあちこちを飛び回っていた。満州から引き揚げて一年間は、夫婦と子共の三人で祖父母のいた曲がり屋に同居していたが、その間に、一町ばかり離れた高台に土地を貰い家も建ててもらって移り住み、言うところの分家を構えた。

僕らは「新屋の伯父さん」と呼んでいた。大酒飲みのこの伯父が私は好きで、高校生になったころ、この新屋の伯父を訪ねては、満鉄時代の話を催促して聞いた。外国に行きたい、暮らしてみたいと思うようになったのはこの影響であった。本家を継いだ伯父は、国鉄の近隣の駅の駅長をしていて、謹厳実直を絵にかいたような人で苦手だった。

都会で商売をしていた私の父は、あの許せない爆弾で店を灰燼にしました。(あの日、父は近隣の軍港の海軍工廠に所用があつて朝早くあの街を離れていたの直接被弾することはなかった)父は、終戦になつ

て母と私を追って来て、一緒に祖父の曲がり屋に居候した。祖父の力もあつて、直ぐに隣町にあつた火薬の製造会社に職を得て通勤しながら再起を窺っていた。一年しない内に、社宅が空いたというので、隣町に一家三人で引越した。父方のことは別に書きたいのでここでは省く。

正月とお盆には、母たち四人の姉妹は、それぞれ子供を連れて本家に「お呼ばれ」に行くのが習わしだった。このことは別途書くので今は置いておく。一緒に付いて行くのは中学生くらいまでの従兄妹たちであった。私も勿論その一人であり、四、五年置きくらいに、開かれていた本家でのいとこ会に、私も社会人になって折が合えば顔を出すこともあつた。この会は、メンバーを大きく減らしながら今も続いている。

末っ子であつた母は、盆正月の他にも何かと里帰りすることが多く、まだ就学していなかつた頃の私は、いつも母について行つていた。

本家への坂道を登りきると、先ず藁葺きの曲り屋の祖父父母に挨拶をする。その足ですぐ母屋に行つて本家の伯母（伯父は勤めに出ていて大抵居られない）に挨拶して、床の間（客間）に入り、長押に並ぶ遺影の中心に座してお辞儀をしていた。私も真似ていた。それから、大きな仏壇にお参りをする事になる。

曲がり屋に戻ると、母は、祖母と、別の部屋に閉じ籠つて祖母の愚痴やらなにやらを聞いていたようである。祖父は、庭や裏山の果実の木に私を連れて行き、好きなだけ取って食べろと言つた。

余談ながら（司馬遼太郎を真似ているわけではないが）母は本家の伯母を「姉様（ねえさま）」と呼び、自分の姉たちに対しては「○○姉ちゃん（ねえちゃん）」と呼んで、使い分けているのが、子供ながら可笑しか

つたのを覚えている

本家の客間は、雪見障子を隔てて一間はある内縁（廊下）に続いており、その外に硝子戸があり、就寝する前には戸袋から引き出して雨戸を閉めていた。雪催いの正月などは、硝子戸を締め切り、雪見障子も閉めきるので客間は、昼でも何となく薄暗く、長押に並ぶ遺影もいよいよくすんで見えた。

しかし、夏になると、硝子戸も、雪見障子も開け放たれ、隣の仏間との仕切り襖も開けて、さらにもう一つ向こうの部屋の奥の硝子戸も明け放ち、高台の庭先から裏の孟宗竹林へ涼風が通り抜けた。

まさに本家の夏座敷になった。

長押に並ぶ褪せた遺影群が存在を主張しているように見えた。

日露戦争で戦死した軍人（曾祖父の弟）の遺影に比べれば、今次大戦の三人の軍人の遺影はまだ新しく貫禄負けしていた。祖父父母の両親の遺影までは覚えていたが、ほかの並んで褪せていた遺影はだれが誰だか覚えてはいない。一番奥に明治天皇、次いで昭和天皇のご真影があつた。

この部屋に入ると、掲げられている遺影の人たちが抜け出てきそうである。年端の行かなかつた頃には怖い思いをしたものである。

また、それなりの齢になって、何かの用でこの客間に入ると自ずから端座するなど居住まいを直すのはその後にも変わらない。

- ・ 長押の人來らむ本家の夏座敷
- ・ 独りとして端座本家の夏座敷